

行学院日朝の法華經談義書について

寺 尾 英 智

はじめに

室町時代の日蓮宗における学僧として活躍した行学院日朝（一四三二—一五〇〇）は、慶林院日隆と共に東西の両学匠として並び称されている。日朝には、著作の他にも書写本、所持本がある。また、日朝自らが筆を執ったものではないが、著作と同様に扱われるものとして日朝の談義を門弟が筆録した聞書がある。これらの聖教は、身延山久遠寺身延文庫を中心として各地に伝えられている。身延文庫所蔵の聖教については、日朝の部において著作、書写本、所持本の分類が行われているが、錯綜している部分も多い。また、日朝の部に収録されていない聖教もあることが明らかとなっている。この様な状態の中で日朝の著作及び聞書、書写本、所持本の全体像を明らかにするためには、関係聖教を網羅的に抽出する必要がある。そこで、日蓮遺文を注釈した談義の聞書、また所持本について抽出を行い、検討を加えてきた⁽¹⁾。

本稿においては、先の検討結果に引き続き、身延文庫所蔵の聖教を主たる対象として、法華經を注釈した談義の聞書に焦点を当てることにする。中世における学僧の営みにおいて談義が重要な要素であることは、近年の隣接諸分野における研究によっても明らかにされている⁽²⁾。法華經の談義を記録した聞書を可能な限り抽出し、日朝の活動の中に位置付けることを試みたい。

一 談義書の検出

日朝の法華經に関する著作には、『法華大綱集』『補施集』『法華草案抄』『法華講演抄』『法華十講』『方便品記』が知られている（『日蓮宗宗学章疏目録』日朝の項）。これらの中では、『法華草案抄』が江戸時代に刊行され、日朝の著として広く知られている。本書は、卷第十二の奥書（身延山大学図書館架蔵本）に

此草案書写意趣者、先年朝師御談之時^七一／部始終文文句句不殘
 慇懃談時者、彼鈔尤大用也、雖然広／博而適時之法談難於取捨故、
 其中耳近処計／一旦于品品少拔出書之也、(略)／久遠寺十一代
 日意

とあり、成立事成が伺える。この奥書によれば、日朝の談義を日意が筆記したものはあるが、談義の聞書から要点を再構成したことが窺われる。本文を見ると、「尋云」「答曰」という問答形式を用いており、聞書の体裁を用いてはいない。談義が行われた場所や年次についても、明確ではない。⁽⁴⁾文明十一年(一四七九)から明応六年(一四九七)にかけて成立した『補施集』一七九巻は、日朝が直接執筆したものである。この他、嘉吉四年(一四四四)成立の『法華大綱集』をはじめとする著作に、談義の聞書が含まれているか明らかではない。そこで、日朝が行った法華経談義の聞書について、改めて確認を進めたところ、次の諸本を見ることができた。なお、諸本の一部には日朝の談義であると明記されていないものも含まれるが、書名や伝来などを勘案して判断した。

- 1、『開合抄』五冊 身延文庫所蔵〔日意B8—1〕〔同4〕、〔他山7日聰7〕
- 2、『二十八品大意抄』一冊 身延文庫所蔵〔他山61日祐1〕
- 3、『御弘通私聞書』一冊 千葉県匝瑳市飯高寺所蔵
- 4、『開意抄』六冊 身延文庫所蔵 日意B9—1〕〔同4〕、

行学院日朝の法華経談義書について(寺尾)

〔日境B15—1〕〔同2〕

5、『薬王品下』一冊 身延文庫所蔵〔日朝A23—16—1〕

6、『不輕品』二冊 身延文庫所蔵〔当朝4—15〕

7、『普賢観経聞書』二冊 普賢観経聞書・叡山文庫所蔵、⁽⁶⁾

観普賢経私見聞・身延文庫所蔵〔他山4日恒6〕

8、『普賢経私』一冊 身延文庫所蔵〔日境B11〕

9、『朝談抄 譬喻品三』一冊 身延文庫所蔵〔当朝4—14〕

10、『朝談薬王品』一冊 身延文庫所蔵〔当朝4—16〕

11、『朝学抄』四十五冊 身延文庫所蔵〔日朝A23〕他

12、『朝伝抄』二冊 身延文庫所蔵〔日伝A2〕

13、『朝演抄』三冊 身延文庫所蔵〔日伝A3〕

14、『提婆品聞書』一冊 身延文庫所蔵〔日朝A28〕

15、『日朝聖人御講聞書』一冊 身延文庫所蔵〔日朝A24〕

上記は全て写本である。この内、1『開合抄』では表紙に「九帖之内」とあることから、本来は九冊で完結していたと考えられるが、現存を確認したものは五冊である。4『開意抄』では同様に「六帖之内二(三、四、六)」とあり、二冊の重複があるため確認したものは四冊である。表紙の銘から、本来は六冊で完結することが分かる。12『朝伝抄』では、「序品下」帖の表紙に「二帖内」、「方便品」帖の表紙に「四帖之内」とあり、それぞれ「序品」帖が二冊、「方便品」帖が四冊より構成されていたと考えられるが、全体の帖数について

行学院日朝の法華經談義書について（寺尾）

は未詳である。13『朝演抄』では表紙に「五帖内」とあり、五冊で完結していたと考えられる。11『朝学抄』については、日朝の弟子である日意の『台家聖教注文』（日意B2（1））に「一、朝学抄 御經抄三十八帖 其外無量義經式帖、普賢經三帖、何_レ私之分、」とあり、法華經本經の部分⁽⁷⁾が三十八帖、開經・結經の部分⁽⁸⁾が五帖であったと考えられる。この様に、日朝が行った法華經談義の聞書には、法華經二十八品全体に及ぶ大部ものから、単発のものまで、多様な形態を取っていることが確認される。

二 初期の法華經談義と聞書

日朝が行った法華經の談義で最初に確認されるものは、享徳二年（一四五三）である。1『開合抄』一（日意B8—1）には、本文の冒頭に経題「妙法蓮華經序品第一」が記され、その下に「享徳二年（癸酉）二月廿日」と開始の日付が記されている。また、六（日意B8—2）の奥書は、次のように記される。

此抄者、朝師卅二御才、為慈父妙善卅三ヶ年／間、正月十一日至七月十五日御談故、自余消物懇也、／聚之書写之、成久遠寺常住、未来初心弘通／志為勸発之也、都鄙之学問者、多分持之／成弘通者也（云云）、

日朝は応永二十九年（一四三二）の生まれであり、奥書に

記される日朝三十二歳の年は、一に示される享徳二年となる。談義が行われたのは一月十一日から七月十五日にかけてのことであったというから、本書一に先だって談義が開始されていたことが分かる。日朝の父妙善が没したのは応永二十九年三月十四日であるとされるから、三十三回忌は享徳三年に当た⁽⁸⁾る。談義は取り越し供養として行われたものであろう。現存する『開合抄』五冊の構成は、以下の通りである。

- 一通序下（序品第一・通序）（日意B8—1）、
- 二 序品・尔時世尊四衆圍繞下（序品第一・別序）（他山7日聰7）
- 六 卷二（譬喻品第三・信解品第四）（日意B8—2）
- 八 卷五・卷六の二卷（提婆品第十二・法師功德品第十九）（日意B8—3）
- 九 卷七・卷八の二卷（不輕品第二十・勸発品第二十八）（日意B8—4）

この構成から、欠本となっている三・四・五は方便品第二、七は卷三・卷四の二卷（藥草喻品第五・宝塔品第十二）であったことが判明する。本文中には、談義の進み具合を示す日付や座数などの記述は見られない。従って、具体的な談義の日数については、明らかではない。

『開合抄』と時を同じくしたと考えられる聞書が、2『二十八品大意抄』である。本書の表紙には「朝廷抄」と表題が記されており、これが原題である。『二十八品大意抄』という書名は、近代に付加された表紙に記されるものである。本書は、

太輔公日祐が永正十六年（二五一九）二月十九日に書写した写本であることが奥書により明らかであるが、本奥書に次のように記される。

本云、／右此書者、日朝上人様初学之時之御談也、而二御志意趣為偏慈父／妙善卅三ヶ廻之御菩提、正月十一日ヨリ七月十六日マテ於鎌倉本覺寺／御講談也、然処二東光院日顯、年来之御願力、為末代弘通之門人、至聞書如願奉書写之也、後見諸人ハ任無二ノ道心ニ題目御廻向所仰也、／

上総国長小郡藻原常在山妙光寺門人日顯（生年四十二才也）、

この本奥書では、談義が行われた期間を一月十一日から七月十六日までとし、七月十五日までとする『開合抄』とは一日の相違があるが、日朝が父妙善の三十三回忌追善のために行ったことが共通しており、一連の談義の聞書とみて良いと考えられる。談義の行われた場所が明らかになる点でも、貴重である。⁽⁹⁾ 鎌倉本覺寺は、三島本覺寺と共に師の日出が開創し、日朝が引き継いだ寺であった。

本書は、法華經の本文を掲げつつ解釈を加えるという形式をとらず、『二十八品大意抄』という書名に示されるように各品の大要を示すという形式がとられている。序品の冒頭には次のように述べられ、三十日間の一部、即ちおおよそ一日一品の速度で談義が進められたことが分かる。

乍去此時節ノ事ハ夏中ノ事ニ候間、殊更修行ヲハケマサンニ於テハ夏ノ初ヨリ如形弘通ヲモ可致処、自他ノ依_レ稽古_ニ于今〇云

行学院日朝の法華經談義書について（寺尾）

云、（略）然ニハヤ半夏モ雖過此時節ノ事ハサスカモタシカタキ故ニ、今日ヨリ来十五日マテ卅日ニ一部ノ可致_ニ結縁_一也、

なお、既に半夏が過ぎたことが記されることから、本談義は五月中旬から六月十五日までの三十日間に渡ったものであろう。

進展の速度については、次に示すように薬草喻品の冒頭でも述べられる。一日に一品の速度で進めるため、本来は詳しく述べるべき事項であっても、委細の旨を述べる事が出来ないという。

サテ薬草喻品ト云事ハ、此ノ品ニ草木ノ譬ヲ取テ説給故ニ薬草喻品トハ云也、草木ノ譬ヲ取ラハ何トテ品ノ題ニハ草木品ト不_レ題、只草ノ一種計ヲ題スルヤラント云不審等モ有之、雖然此等ハ先学文方ノ事ナレハ且ク略ス、其上一日ニ一品ヲ申事ニテ候ヘハ悉是略存シテ化道ヲ奉ト申事ナレハ不能_ニ委細ノ旨_一云云、

本書の聞書は二十八品について整足するが、安樂行品第十四まで進んだ後、再び提婆品第十二から進められており、提婆品、安樂行品の三品について重複が見られる。

享徳二年には、もう一点の聞書が確認される。3『御弘通私聞書』は内題下に「日朝 享徳二十二月五日」とあり、同年十二月五日に開始されたことが分かる。奥書は、次のように記される。

「比企谷玉泉房日顯也」

行学院日朝の法華經談義書について（寺尾）

右一七日之妙法談者、式人為親追孝奉／請処也、然当座聴書之間、文字之損落／文章之失墜不可称計者也、師法門之／次第相連、以短慮之不及処略記之、／九牛之一毛四海之一瀋招所□歟、／雖受文釈古事起縁等委不能注之、／万一後覽專□□而□□、返々後覽／当座聞書候間／不可有嘲弄候、／享徳式年十二月十一日

奥書によれば、談義の期間は七日間である。この談義は、比企谷、即ち鎌倉妙本寺の住僧である玉泉房日顕が、両親の供養のために日朝を招請して行ったものであった。談義の場所は、恐らく鎌倉であろう。十二月に行われた談義であることは、本文の冒頭に師走の義を説くことから窺うことが出来る。

本書は七日間の談義であったため、法華經の全体に及ぶものではない。談義の対象となっているのは、方便品第二、譬喻品第三、化城喻品第七、法師品第十、涌出品第十五、勧発品第二十八の六品である。

三 寛正・文明年間の法華經談義と聞書

享徳二年の後、法華經の談義が確認されるのは、寛正年間に入ってからである。5『藥王品下』の内題並びに奥書は、次のように記される。

（内題）藥王品下 三月廿四日 於三嶋本覺寺
（奥書）寛正二年（辛巳）四月日 朝師御談一品訖、

本書の談義は、寛正二年（二四六一）三月二十四日から三島本覺寺において行われた。本文には、区切り毎に同日から四月九日に至るまでの日付が記されており、談義の具体的な進展が明らかとなる。談義は十五日間に亘り、一日も欠かさず行われている。この談義は、奥書に記されるように、藥王品第二十三の一品を談じたものであった。本文冒頭の三月二十四日の談義において、

昨日モ返々申ス如ク、転輪聖王ノ解ノ心ハ諸ノ小王ノ中ニハ転輪聖王第一ナルカ如ク、此法花經モ諸經ノ中ニ第一也トノヘリ、と述べており、談義そのものは同日以前から連続して行われていたことが分かる。⁽¹⁰⁾

同年には、更に六月にも談義が行われたと考えられる。同年六月から七月にかけて、日朝は鎌倉妙本寺において法談を行っていた。『要法文下』〔日朝C-6〕の奥書には、次のように記される。

寛正第二（辛巳）七月十三日 鎌倉比喜谷長□山□□二十日法
談／砌、玉明房日慶阿闍梨令皈敬□ 日朝（花押）

この法談に相当すると考えられる聞書が、14『提婆品聞書』である。本書の内題並びに奥書に次のように記され、談義は六月二十二日から鎌倉妙本寺で行われているからである。

（内題）妙法蓮華經提婆達多品第十二 六月廿二日
（奥書）右、此聞書者、日朝聖人於比企谷妙本寺御談也、

本書は、『薬王品下』と同様に提婆品第十二の一品を談じたものではなく、分別功德品第十七に至る六品の談義聞書である。談義の日付も記されており、進展の様子は次の通りである。

六月二十二日・二十三日 提婆品第十二／二十四日 勸持品第十三／二十五日 安樂行品第十四／二十六日 涌出品第十五／二十七日・二十八日 寿量品第十六／晦日・七月一日 分別功德品第十七

翌寛正三年（一四六二）にも、談義が行われている。6『不輕品』は二冊が合綴されるが、第一冊の内題並びに奥書は、次のように記される。

（内題）不輕品 廿二日

（奥書）寛正第三天八月日／京都於学養寺、日朝聖人御講 沙門日教（花押）

本書も不輕品第二十の一品を談じたものではなく、勸発品第二十八に至る九品の談義聞書である。談義の日付も記されており、進展の様子は次の通りである。

八月二十二日 不輕品第二十／二十三日 神力品第二十一／二十四日 嘱累品第二十二／二十五日 薬王品第二十三／二十六日 妙音品第二十四／二十七日 普門品第二十五／二十八日 陀羅尼品第二十六／二十七日 妙莊嚴王品第二十七／二十九日 勸発品第二十八

行学院日朝の法華経談義書について（寺尾）

本書第二冊の内題並びに奥書は、次のように記される。

（内題）京都於心鏡坊 日朝聖人御講 寛正第三天
（奥書）沙門日教（花押）

九日及び十日の日付と共に方便品第二、譬喻品第三の文がそれぞれ掲げられ聞書の本文が記されるが、聞書としては未完のものであると思われる。日朝が談義を行った学養寺は、京都における身延門流の拠点となった寺院である。心鏡坊については、未詳である。

寛正年間の後、法華経談義が確認されるのは、文明年間である。11『朝学抄』の写本は重複分を含めて四十五冊が確認されているが、法華経本品三十八冊、開結二経五冊で一具を構成していたと考えられる事は前述した。談義が開始されたのは、序品一（他山31日住10（1））の内題に「妙法蓮花経序品第一 文明第九四月五日始之」とあり、文明九年（一四七七）四月五日であることが分かる。『朝学抄』として聞書をまとめたのが、弟子の日意であることは、日朝の許で学んだ日海が『日海記』に「一朝学抄之事 日朝聖人御談也、日意上人御私也、」と記しており、各冊の内題に「随喜功德品 日朝聖人御講 日意記之（随喜功德品（日朝A23—11））」などと記されることから明らかである。写本に記された談義の日付は断続的であるが、その推移から見て、日朝が勸発品第二十八の談義を終えたのは文明十一年（一四七九）も半ば

行学院日朝の法華経談義書について（寺尾）

を過ぎていたと思われる。⁽¹²⁾ 本書は、『法華草案抄』の元となった可能性があらう。

この『朝学抄』の談義と期間が重複するものに、9『朝談抄 譬喩品三』、10『朝談薬王品』がある。前者は、本文頭注に「六月十六日」、奥書に「文明第九七夕廿四日奉書畢」と記されることから、文明九年六月十六日に開始された談義の聞書であると考えられる。『朝学抄』の譬喩品も、談義の日付は未詳であるが、同年六月に行われていた可能性が高く、また上中下三冊で構成される。従って、『朝学抄』と同一の談義の聞書である可能性があり、内容の精査が必要である。後者は、内題に「薬王品下 日朝上人御談 文明十七月九日」とあり、文明十年（一四七八）七月九日に開始された談義の聞書である。『朝学抄』は薬王品第二十三が欠本となっているが、同書の法師品第十九は同年六月二十六日に書写されている。やはり同一の談義の聞書である可能性もあらう。7『普賢観経聞書』は、文明十一年（一四七九）九月九日から談義が開始され、十月十九日に終了していることが内題・奥書により分かる。新たに建立された二重宝塔に仏像が遷座され、その法楽のためにおこなわれた談義である。⁽¹³⁾

おわりに

日朝の法華経に関する談義と聞書について、検討を進めて

きた。現存の聞書からは、法華経の談義が行われたのは、享徳、寛正、文明年間に集中していた。法華経の談義は、何度も繰り返し行われ、その度に聞書が作成されていたことも明らかになった。

本稿では4『開意抄』、12『朝伝抄』、13『朝演抄』、15『日朝聖人御講聞書』など、検討を加えられなかったものもある。また、談義の内容についても未検討である。今後の課題としたい。

1 拙稿「行学院日朝関係の聖教について」（『印度学仏教学研究』五七巻二号、二〇〇九年）、同「行学院日朝の蔵書形成について」（同五八巻二号、二〇一〇年）。

2 廣田哲通「天台談所で法華経を読む」（翰林書房、一九九七年）、永村眞「中世寺院史料論」（吉川弘文館、二〇〇〇年）など。

3 日朝の伝記については室住一妙「行学院日朝上人」（身延教報社、一九五一年・第二版、行学院覚林坊、一九八二年）が詳細である。この他、北川前肇「行学院日朝の顕本論」（同『日蓮教学研究』、平楽寺書店、一九八七年）、身延山久遠寺編「行学院日朝上人」（大東出版社、一九九九年）など。

4 身延文庫所蔵日意写本『法華艸案抄』（日意B28）第二巻内題下には「丁卯二 廿日始」とあり、本書の元になった談義の日付かとも考えられる。しかし、日朝が在世中の丁卯年は文安四年（一四四七）となり、日朝は二十六歳の若さである。一方の日意は未だ四歳であり、仮に日朝の談義であったとしても聴聞することは不可能である。天台僧であった日意が日朝の門下

となったのは文明四年（一四七二）四月以降、同五年四月以前のことである（桑名貫正「身延山十二世円教院日意上人伝に關する二、三の問題について」『身延論叢』二二号、一九九七年）。なお、同写本の各巻には、談義の座数と考えられるものが、次のように記される。第二巻末「十座」、第三巻末「六座」、第四巻末「十二座」、第五巻末「八座」、第七巻末「八座」。

5 以下、身延文庫架蔵資料については、『身延文庫典籍目録』上・中・下（身延山久遠寺、二〇〇三年～二〇〇五年）により「」内に所蔵番号を示した。奥書などの引用に当たっては、句読点や文字を改めた場合がある。

6 成田教道「日蓮関係典籍・雜書に關するノート」（『興風』二〇号、二〇〇八年）三二四頁・三四一頁以下。

7 桑名貫正「開山円教院日意上人伝」（『本山妙傳寺資料鑑』、本山妙傳寺、一九九六年）一八〇頁。

8 本書については室住一妙『行学院日朝上人』三九頁以下に指摘がある。

9 本書については『日蓮宗年表』（日蓮宗史料編纂会、一九四一年）に指摘がある。

10 『日蓮宗年表』によれば、同年三月二十四日、田島弘通所において法談の記事を掲げ、出典を「仙聞」とする。本書は15『日朝聖人御講聞書』であると考えられるが、奥書などから年次を明らかにすることは出来ない。

11 『日蓮宗宗学全書』二三卷一六三頁。

12 拙稿「日蓮聖人から学室へ」（『知恩報恩—身延山学園四五〇年誌—』、身延山大学、二〇〇七年）一二頁以下。

13 拙稿「身延山久遠寺の伽藍変遷—五重塔建立まで—」（『宝塔涌現』、身延山五重塔復元建立奉賛会、二〇〇九年）。

行学院日朝の法華経談義書について（寺 尾）

〈キーワード〉 聞書、談義、日朝、『法華経』、身延山久遠寺
（立正大学教授・博士（文学））